

英詩を味わうのに必要な読解力とは？

笠原 順路

0. とかく英詩は、英語教育関係者の間では分が悪い。一つには文学や語学専門者がやたらと難解な説明を振りかざしているように思われているからでもあろう。本稿では、英詩を味わうのに必要な読解力について、文学や語学の専門領域に深入りすることなく、具体的に3篇の詩的な英文を示し平易に味わっていく。本稿で詩とは、詩的要素を含む散文をも意味し、読解力とは聴いて理解する力をも意味するものとする。

1. 例文 1 – Alexander Pope, “Epitaph, Intended for Sir Isaac Newton” (1730)

Nature and Nature’s Laws lay hid in Night.

And God said, *Let Newton be!* and All was *Light*.

この2行を味わうのに絶対的に必要不可欠な基礎知識は、旧約聖書冒頭部、天地創造の場面 (Gen. 1:1-3)である。

1. In the beginning God created the heaven and the earth. 2. And the earth was without form, and void; and darkness was upon the face of the deep. And the Spirit of God moved upon the face of the waters. 3. And God said, Let there be light: and there was light.

1.1 詩の最も重要な特徴は、同音の反復が特別な効果を生み出すことにある。

例文1における同音の反復の最大の効果は、行末にある。

Nature and Nature’s Laws lay hid in **Night**. /-aɪt/

And God said, *Let Newton be!* and all was **Light**. /-aɪt/

行末の/-aɪt/という音が、対立する意味の Night-Light で使用されている。それによって「Newton の業績によって、暗から明へ変化した」という意が強調される。この行末における同音を「脚韻 (Rhyme)」という。先行テキスト (聖書) を踏まえた大意は、「ちょうど創世記で神が「光よあれ」とのたまわったことで暗かった混沌が明るくなり世界が創造されたのと同様に、神が「ニュートンよ、あれ」とのたまわったことで、つまりニュートン物理学の偉業によって、これまで隠れていた万物をつかさどる法則に明かりがともされたのだ」となる。

1.2 脚韻ではないが、もう一つ重要な音の繰返しがある。

Nature and Nature’s **L**aws lay hid in Night: /ɔ:/

And God said, “Let Newton be!” and **A**ll was light. /ɔ:/

/ɔ:/ の反復の効果 —— 「万物 (**All**) が、ニュートンの解明した**法則 (Laws)** に従っている」ことが強調。

1.3 さらにもう一つ、反復される類似音がある。

Nature and Nature’s Laws lay **h**id in Night: /ɪ/

And God said, *Let Newton be!* and All was **L**ight. /i:/

厳密に言えばこの二つの音は同一ではないが、韻律を考える場合は、同一と見做して問題ない。これらの音の反復により、「隠れている状態 (hid)」と「存在している状態 (be)」の対比が音韻上、鮮明になる。無論、1行目で隠れていたのは「法則」であって、ニュートン自身ではないのだが、「隠れている (hid)」という意味を成していた /ɪ/ の音とほぼ同じ音 /i:/ を用いて、それとは反対の「存在する」を意味する be が来ることで、この be が一層際立つという効果がある。しかも、ここで面白いのは、それを先行テキストである聖書の *Let there be light* に倣って *Let there be Newton* とせずに *Let Newton be* としたことだ。There is Newton. でも Newton is. でも、いずれの be 動詞も「存在する」を意味する完全自動詞に変わりはないが、冒頭に there のない Newton is. の方が、より純粹に完全自動詞的に見え、Newton が一人気高く立っているという印象を与えずにはおかない。それを *Let...* につづけた *Let Newton be*. からは、神の意志として、ニュートンを崇高にあらしめたい、ということが読み取れる。

2. 例文 2 – J. C. Squire, “In Continuation of Pope on Newton” (1926)

It did not last: the Devil howling “Ho,

Let Einstein be,” restored the status quo.

2.1 Pope の詩とパラレルな構造

	Pope	Squire
①発言	God, “Let Newton be.”	Devil, “Let Einstein be.”
②韻律	Rhyme (脚韻) が中心 →ME 以降 (1066～) の韻	Alliteration (頭韻) など、Anglo-Saxon 詩に 特徴的な音が目立つ →OE 詩 (～1066) に特徴的な韻 →古代の出来事のような印象
③結末	All was light.	restored the status quo. →よく戦争の記述で使用される表現
④先行テキスト	Bible : ユダヤ・キリスト教文化圏における 表の天地創造の物語	<i>Paradise Lost</i> における天地創造の裏物語 (=神の軍勢と反逆の天使の軍勢の戦い)
⑤文体	詩的	擬似韻文=散文

3. 例文 3 – From David Brewster, *Memoirs of [...] Newton* (1855)

I do not know what I may appear to the world; but to myself I seem to have been only like a boy playing on the sea-shore, and diverting myself in now and then finding a smoother pebble or a prettier shell than ordinary, whilst the great ocean of truth lay all undiscovered before me.

引用部前半 (～ordinary) と、後半 (whilst～) では、後半の方が詩的に感じられる。それは、“the great ocean of truth” の比喩性・リズムによるところが大きい。

3.1 “ocean” の比喩性

この文脈では、原義の「海」が、比喩的に用いられて「海のような大きな広がり」の意味に転位する。本来の意味が比喩的な意味に転位することによって、詩的になる。さらにこの場合、like や as などを用いない隠喩的に使用されているため、詩的効果が一層高まる。

とは言え、この例の場合、完全に比喩の意味の方に触れ切っていないのが、この部分の詩的効果をより一層高めている。例文 3 では、前半部で「浜辺で遊ぶ子供 (like a boy playing on the sea-shore)」が言及されているため、物理的な「海」の意味が修辭的残像としてしっかりと残っている。その直後、後半部で比喩的に ocean が用いられていて、ocean の意味が、原義からの強い引き戻しにさらされているため、比喩の意味の方だけに収斂してしまうことがない。言葉を変えて言えば、比喩の意味を指向する semantic vector と、原義を指向する semantic vector が、相互に反対方向に引き合っていて、この緊張した相反するベクトルの微妙なバランスの上に ocean の意味が成り立っていて、それが詩的効果を高めているのである。

これを *Hamlet* の第 4 独白 (To be, or not to be...) における “to take arms against a sea of troubles” の sea と比較してみると、*Hamlet* では「海」という原義よりも、「膨大な量の」という比喩の意味の方が優勢となっている。原義と比喩の意味の双方向からの引力のバランスという点においては、Newton の発言の方に軍配をあげたい。

3.2 音が意味を模倣する “the great ocean of truth”

《弱+強》のリズムで “the great ocean of truth” を読もうとすると、ocean の /ou/ を《弱音+強音》の時間をかけて読む必要が生じ、/ou/ の箇所朗読スピードが落ち、それによって「大海原」の感じが音で表現されることになる。音が意味を模倣しているのが耳に心地よい。

3.3 例文 3 前半部の出典は John Milton, *Paradise Regained*, 4.326-41 か?

Paradise Regained は、新約聖書で荒野のイエスがサタンから試される場面に材をとった詩。当該部分は、イエスがサタンとの議論のなかで、ギリシア哲学者たちの業績を、浜辺で小石を集めている子どもに譬える箇所。同詩ではこの後、ユダヤの民がバビロンに捕囚の身となっている時に母語ヘブライ語でうたった詩が、敵である新バビロニア人——ヘブライ語が分からないはずの新バビロニア人——の耳に、心地よく響いたことが述べられる。浜辺で小石を拾って遊ぶ子供の譬えの後に、ヘブライ語の詩の音楽性を称える詩行を置いた Milton の意識と、浜辺で貝殻を拾う少年の譬えの後に、音楽性に富む例文 3 の後半部を置いた Newton の意識と、通底するものがあるか否か、今後の研究に俟ちたいところである。